

## 審査の結果の要旨

氏名 綾城初穂

本稿において「ディスコース」とは、社会のなかで共有される言葉のイメージや暗示的意味の集合体と定義される。人は自分自身を理解するのに自然とディスコースを用いるが、それが否定的な意味をもちその人を脅かす場合もあり、ときに心理行動上の悩みを抱えるクライアントの問題状況の背景ともなりうる。個人の行動や内面に注目しがちであった心理臨床実践のなかで、そうしたディスコースの作用は見落とされがちであったが、本研究はその影響過程とそこで見られる個人の対処の可能性について検討したものである。

論文は全4部9章からなる。第1部「問題」では、第1章でディスコースの概念とその「支配性」について議論され、本研究のモチーフが明らかにされた。第2章では、ディスコースを検討する方法としてのディスコース分析が紹介され、従来の方法の問題点を指摘した後、その発展としてポジショニング理論が導入された。第3章ではポジショニング理論に基づく心理学研究が概観され、特に臨床心理学領域の研究の不足が指摘された後、第4章で本研究の研究設問と研究の全体構成が提示された。第2部では非臨床群である日本人キリスト教徒を対象に、「宗教」ディスコースに関するインタビューを行い、「宗教」という言葉がどのように語られるか（第5章）、「宗教」が否定的なディスコースとして体験されるときどのような対処がなされるのか（第6章）といった問題に対して、ポジショニング理論を用いた分析・検討が行われた。その結果、彼らは「キリスト教徒」や「日本社会に生きる者」というポジションを適宜用いて動的に自己を提示していること、ポジション間に齟齬が感じられると「どちらも否定してはおらず、ただ個人的には一方に従っている」といった「個人的ポジショニング」を通じて対処する戦略が認められることが示された。第3部ではカウンセリング場면을会話分析の手法で分析しているが、まず、クライアントが自分の「問題」をどう語るかを検討し、そこに支配的ディスコースに対するクライアントの抵抗の現れを見出したほか、援助者によるそうしたディスコースの再生産にも注目した（第7章）。さらに、ディスコースの支配性はこういった形で軽減されるかと問い、受動的なポジショニングを能動的なポジショニングに変化させるところに1つの可能性を見出した（第8章）。最後の第4部では、以上の知見を踏まえつつ、支配的なディスコースに対してそれを受動的にのみ固定的に受け取るのではなく、状況によって積極的にポジションを変化させられるような「流動的ポジショニング」の重要性が示唆されると同時に、臨床心理学的な実践への含意が議論された（第9章）。

本論文は、臨床心理学実践を見る視点として従来用いられてこなかったディスコースの概念およびポジショニング理論を用いることで、暗黙のうちに実践を拘束しているかもしれない心理社会的な要素を分析する方法を提示し、その分析を実際に行ってその可能性を具体的に示した点で特に意義が認められる。よって本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに相応しいものと判断された。